

なにわ

シリーズ
266
巻

人物誌



女芭蕉・永松なみ (五)

地域史研究者
三善貞司

おくの細道を辿り『秋かぜの記』刊行後、

夫浮風の故郷で生を全う

明和6年(1769)、京の岡崎にあった諸九尼(なみの俳号)の庵室湖白庵に、まっ赤になつて興奮した芭蕉研究学者蝶夢(ちよつむ)がとびこんできます。

「た、大変なものを伊賀(芭蕉の故郷)で見つけてきました」と懐(ふところ)から手書きの冊子をとります。去来(きょらい)芭蕉の高弟(こうてい)自筆の『おくの細道』です。

「私はこれを出版し、世の中に芭蕉先生の偉大さを知らせたいのです。お手伝いください」命令口調の蝶夢の情熱に、老いた諸九尼も若き日の夫湖白浮風(ふふう)に初めて会ったときの喜びが、よみがえってきました。去来の字の判読からはじまり版の校正まで、2人は魂を奪われたようになります。

こうして刊行したものが、現在、蝶夢版『おくの細道』と呼ばれる貴重な文献です。「私もおくの細道を歩いてみたい」

作業が終わった明和8年(1771)、諸九尼は蝶夢にこういいました。蝶夢はあわてとめました、どう説得しても耳に入りません。まるで少女のような表情でだだをこねます。ときに、諸九尼は57才でした。なにしろ路銀もろくに持たぬ老女のひとり旅です。

心配した蝶夢は、かつて松島(宮城県)に旅したとき知りあった人たちはじめ、あらゆる学者・俳人・僧侶・富商・豪農・村長などに山のような紹介状を書いて持たせ、送りだします。

江戸ではまだ諸九尼の夫浮風が尊敬した野坡(のさか)の門人たちが生き残っていました。野坡は江戸の越後屋(有名な両替商「銀行」)の番頭だったことがあり、なじみの地です。

「そうか。あんたが野坡先生の顕彰碑を大坂に建ててくれた浮風の奥さんか」となつて大歓迎されます。次々に知人を紹介し、旅費もカンパしてくれます。

こうして諸九尼は、江戸、鹿島、水戸、白河、松島、那須、日光、姥捨(おばすて)、妻籠(つまじめ)、近江八幡、石山、京都と550里を約5ヶ月で歩きます。単純に計算すると1日に約14キロ歩いたことになります。もちろん、数日間宿泊したり句会に参加したりしていますから、当時の女性の年齢からみて驚くばかりです。

この旅の記録が明和9年(1772)刊行の『秋かぜの記』です。出版してくれたのは亡夫浮風と協力して、野坡顕彰碑を建立した書店経営者額田(ぬかだ)文下(ぶんか)です。かつて浮風となみが不倫の軼落ちをして京に逃げたとき、かくまってくれた額田正三郎の息子です。上下2巻の作品ですが、書きだし部分の一部だけを、原文で書いておきます。

「芭蕉先生の奥の細道にひかれて」年老ひし尼の身なれど、道祖神の憐みたまふにや、はからずも誘はれ逢坂の関のあなたにこえゆくことになりぬ。住みなれし草の戸もまたいつかはと、名残の露置きそふるここちす」

『奥の細道』とよく似ていますね。末尾は天津の石山寺に到着し、「はらりはらり萩吹く音やびわのうみ」という句でとめています。

この旅のエッセイは女流文学としてはまさに異色の内容ですが、刊行されたあと評判になつたとの資料はありません。おそらく彼女が世話になつた人たちに、お礼のつもりで贈つただけだつたと思われます。『秋かぜの記』の全文が知られるようになったのは、昭和36年（1961）有名な九州の芭蕉研究者大内初夫氏が復刻してからです。

安永2年（1773）岡崎の火事で、湖白庵が類焼します。

「草庵焼け跡をながめて

焼けし野の所々やすみれ草」

と詠んだ彼女は、額田文下の書店に移り世話になりますが、安永6年亡夫浮風の17回忌をすませたあと、浮風の生まれた直方（現・福岡県直方市）をめざして旅に出ます。亡夫の故郷で余生をすごし、静かに夫の冥福を祈って死のうと思つたからです。別れのあいさつを受けた蝶夢は、

「忘るまじ身にしむ今日の物語」

と短冊に記し与えます。

直方では、あばらやでひっそり暮らし、天明1年（1781）9月、66才で世を去りました。

この2年後に与謝蕪村が亡くなっています。

読者の皆さん、浮風となみ夫婦をどのように思われますか。

みな紅葉

汲めば水なり

高雄川

永松なみ



高雄は京都の西北にあたる溪谷で、榎尾、梅尾とがのおと共に紅葉の名所である。溪流は清流川となって保津川に合している。句意は岩も岸も悉く散紅葉で錦の如く埋めつくされていて、試みに岩間の紅葉を汲みとるよりに両の手で、掻きとって見ると、どこまでも紅葉かと思われたのには美しい水が流れていた。

「湖白庵諸九尼全集」（和泉書院）の阿部王樹氏の鑑賞を引用させていただきました。